

## 母性観の推移(2)

メアリー・シェリーの母性観

### Changing Motherhood (2): Mary Shelley's Idea of Motherhood

平林美都子

Mitoko Hirabayashi

#### 女性作家とゴシック小説

ゴシック小説のフェミニスト的な読みを展開するクレア・カハーンは、小説中のヒロインの体験は女性が女性であるが故の体験だとして、そこに母と娘の問題を読みとっていく。典型的なゴシック小説の構造は、母親を亡くした若いヒロインが閉ざされた空間の中の秘密を探っていくというものである。カハーンは、従来のゴシックの解釈はエディプスのプロットの中に、父/兄と娘/妹との近親相姦のモチーフを読みとるものであり、その解釈はテキストから女性の登場人物/作家の欲望が排除されてしまっていると説明する (Kahane 334-335)。カハーンはアン・ラドクリフの『ユードルフォ城の神秘』から現代のフラナリー・オコーナー、カーソン・マッカーズのゴシック小説を分析して、いずれもエディプス・プロットは表層上のものにすぎず、ヒロインが立ち向かうものは「死んでいながら—死んでいない母の実体のない存在」だと指摘する (336)。しかし伝統的なゴシック小説のヒロインは物理的に幽閉され、その恐怖心とは、エドモンド・バーク流に言うところの見えないものから産み出されたのに対して、家父長制社会という外界のゴシック構造に幽閉されている現代版のヒロインは、女性性に不安を持つ。エレン・モアズは、それは自分への恐怖に見える形にしたものであるために、一層恐ろしいと語る (Moers 107)。自分への恐怖とは女性性の問題に関わる恐怖であり、母なるものすなわち母の身体を持つことである。

メアリー・シェリーも女性作家のゴシック的な恐怖を持っていたといえよう。つまりそれは妊娠・出産という女性性、母の身体に閉じこめられていることへの葛藤である。彼女のゴシック小説『フランケンシュタイン』の中心には「死んでいながら—死んでいない[メアリー・シェリーの]母の実体のない存在」が確かにある。もっともこの小説では主要登場人物がみな男性であり、三人の男性の語り手の欲望が三つの語りの構造の前面に押し出されているため、たとえばジョン・ダッシンガーのように、これを父と息子のエディプス的な葛藤の物語だと解釈することも妥当であろう。しかしながら1970年代後半のフェミニズム文学批評の流れの中で、モアズが『フランケンシュタイン』を母性不安と結びつけた「出産神話」と解釈して以来、サ

ンドラ・ギルバートとスーザン・グーバー、バーバラ・ジョンソンらは、メアリー・シェリーの自伝的な要素と小説の中で語られる出来事との関連性に焦点をあてるようになってきた。こうした批評の動向は、ヒロイン/女性作家の探求すべきゴシック空間の秘密の中心が娘の内にある母なるもの、いいかえれば女の性的欲望だと言うカハーンの指摘と重なる。そしてそれはゴシック小説「フランケンシュタイン」の探求すべきテーマであり、メアリー・シェリーのゴシック的な人生体験とも重なっていくのである。以下この小論では最近の批評の動向に沿って、メアリー・シェリーのゴシック小説の中心に彼女の母性観を読みとっていきたい。

### 母と娘の欲望の物語

メアリー・シェリーの母メアリー・ウルストンクラフトは没落した中産階級の出身だった。祖父は織布業者だったが、自作地主に転業した父は大酒飲みで破産寸前、母は全くの無力な女だった。彼女は正規の教育を受ける機会はなく、隣家の牧師から学んだという。彼女は若くして自立し、24歳で学校経営をはじめた。その後書店を経営するジョゼフ・ジョンソンを通じて、画家のフェーズリー、詩人のブレイク、自由思想家のトマス・ペインらと交流するようになる。ルソーの思想やフランス革命をきっかけに著述をはじめたメアリー・ウルストンクラフトは、「人間の権利の擁護」「女性の権利の擁護」などを次々に著した。1793年34歳のとき、アメリカ独立戦争に参加した陸軍大尉であったギルバート・イムリーと恋愛関係になるが、正式な結婚はしなかった。娘フランシス（ファニー）の誕生（1794年）後、彼の度重なる不貞に彼女は二度、自殺を図った。最初はアヘン、二度目はテムズ河へ身を投げたが、いずれも未遂に終わった。その翌年（1796年）、彼女は結婚制度の廃止を説く自由思想家ウィリアム・ゴドウィンと出会った。知り合っただけでなくメアリー・ウルストンクラフトは妊娠し、生まれてくる子どものために、ゴドウィンの信条に反することではあったが、二人は結婚した。ウルストンクラフトは娘メアリーの出産11日後に亡くなった。メアリーが3歳のとき、父は二人の子どもチャールズとジェーン（のちにクレアと呼ぶ）を連れて未亡人メアリー・ジェーン・クレアモントと再婚した。そしてその翌年二人の間にウィリアムが生まれた。

著述と並んで生活のために出版業も営むようになったゴドウィンの家には著名な文筆家がよく集まった。ラム、ハズリット、コールリッジらである。幼いファニーとメアリーはソファの陰に隠れて、コールリッジの朗唱する「老水夫行」を聞いていたという。メアリーが14歳のとき、スコットランドの知人宅に長期滞在することになった。その間ゴドウィンは、彼の自由思想に心酔した青年パーシー・シェリーと彼の妻ハリエットと知り合い（1812年）、交流を続けていた。スコットランドからメアリーが戻って、シェリーに会ったのが1814年5月。メアリーがシェリーと駆け落ちしたのは7月であり、18歳を迎える前のことだった。

「フランケンシュタイン」が執筆された1816年は、メアリーの近辺で死が相次いで起こった年だった。1815年、彼女は妻子あるシェリーとの間に未熟児を出産したが、その女兒は二週間で死んでしまった。「フランケンシュタイン」を書き始める一年三ヶ月前のことである。翌年

の1816年、まさに小説執筆の年に彼女は再び出産し、その男児をウィリアムと名付ける。同じ年の10月、メアリーの異父姉であるファニー・イムリーが自殺した。母ウルストンクラフトがイムリーと正式な結婚をしないで生まれた私生児であるという事実、ファニーが気づいたためだった。その二ヶ月後には、シェリーの妻ハリエットが夫以外の男性との間の子どもを身ごもったまま、ハイパークのサーベインタイン池で身投げ自殺をした。不思議なことにこれらの死すべてに、「婚外の妊娠」、「私生児」というレッテルが見え隠れしている。前の年のメアリーの娘の死は、未熟児という不慮の死であったものの、当時、メアリーの立場はシェリーの愛人でしかなかった。そして彼女の母ウルストンクラフトもメアリーを妊娠したとき、ゴドウィンの妻ではなかった。もちろん婚前の妊娠と死との因果関係の有無はありえないとしても、彼女もメアリー出産後に死んだ。

当時の道徳観から考えれば、婚外妊娠や私生児の出産がその母に恥辱をもたらすのは言うまでもないことだった。メアリーの異母妹クレアがバイロンの私生児を出産した事実をまわりがひた隠しにしたように、本人のみならず、それは家族にとっても決して消すことのできない汚点だったのである(図1)。そうした女は恥辱の烙印を押されたままルース(Gaskell, *Ruth*)のようにひっそりと生き抜くのか、あるいは死を選ぶしかなかった(図2)。マーガレット・ホームズが、現実のメアリーのまわりで起こった私生児の出産と、片親(フランケンシュタイン)だけから生まれた怪物との状況を関連づけて説明しているように、『フランケンシュタイン』執筆時期に集中する度重なる生と死は、確かに異常とも思えるものであった(Homans 111-112)。そしてそれらの生と死の根源には、婚外の妊娠、出産にまつわる女の性的な欲望/母の身体が存在した。ウルストンクラフト、ハリエット、そしてメアリー自身にも。この小説



図1 リチャード・レッドグレイヴ、『見捨てられたもの』。1851年。



図2 オーガスタス・エッグ,『過去と現在』, No.3, 1858年。

の中ではあたかもメアリーの不安を映し出すかのように、性的な欲望が抑圧されているだけでなく、さらに母なるものが抑圧、排除されていくのである。

### 母親排除の物語

『フランケンシュタイン』において母親のあるべきモデルが存在しないということは注目すべき点であろう。フランケンシュタインの怪物創造の外枠の物語、ロバート・ウォルトンは幼いころ母親を亡くし、母親代わりの姉マーガレット・サビルによって育てられた。フランケンシュタインの母キャロリーヌもまた母亡き子であった。父親ボーフォールはフランケンシュタインの父の親友で、ボーフォールが死んだ後、彼女はフランケンシュタインの父のもとに引き取られ、それから二年後に二人は結婚したのである。エリザベスの生い立ちもキャロリーヌに似ていた。ミラノの貴族の娘である孤児の彼女を、フランケンシュタインの両親は養女にした。怪物の長い語りにも登場するトルコ人サフィの母も、フィリックスとアガタの兄妹の母も死んでいた。そしてキャロリーヌ自身も、猩紅熱に罹ったエリザベスの看病をするうちに感染し、まもなく死んでしまう。

母と子の関係の希薄さと対照的なのが家族内のそれ以外の近親恣的な関係である。ウォルト

ンは姉への手紙の中で「大事な年頃を姉さんの優しい女手に育てられた」(20)と述懐する。またフランケンシュタインにとってもエリザベスは「私のもの」(36)であり、「どんな表現も私たち二人の関係を言い表すことができない...妹以上の存在」(35)だった。さらにまたポーフォールとの関係を考えれば、フランケンシュタインの父にとり妻キャロリーヌは「父娘」と呼べるものだろう。フランケンシュタイン自身も母に寄せる父の態度を「なんともいいようのない上品さが漂っていた」(33)と表現している通りである。小説における母親の不在が、男女の関係をなぜこのように性的に抑圧された肉親に限定されていくのかは、後でもう一度考察したい。

母の死という生身の母親の存在の希薄さは母を理想化する。フランケンシュタインは亡き母を「死の床にあっても、このもつともすぐれた女性の心の強さ、気だての優しさは消えさることはな[く]」、「その顔には、死んだあとも愛情が表れていた」(43)と描写する。またサフィはキリスト教の洗礼を受けたアラビア人の母のことを「言葉をきわめ、熱をこめてほめそやした」(123)。この母は「女性には禁じられている、知性の優れた力、精神の独立に憧れを持つよう」(124)娘のサフィに教えたのである。マーク・ルーベンスタインも指摘しているように、サフィの母はまさしくメアリー自身の母ウルストンクラフトを描写したものであろう (Rubenstein 169)。メアリーが成長過程で母の著書を繰り返し読んでいたことは、これまでも幾人かの批評家によって指摘されている (Rubenstein, Moers, Gilbert and Gubar)。さらにサフィの母親の描写が怪物の声を通して語られていることから、初めて知った母という存在が怪物にとっても理想化されたのである。

母の死と理想化が母親抜き誕生を導いていくことは、メアリーの生い立ちから考えれば当然なのかもしれない。彼女の周囲で起こった妊娠、出産という女性の性的欲望を抑圧あるいは排除することは、逆に彼女の執着心の強さを示しているともいえるだろう。ギルバートとグーバーは、メアリーがウルストンクラフトの著作だけでなくその書評、とくに「女性の権利の擁護」に対する「哲学的な浮気女」という酷評を読んだ可能性を指摘している(222)。「浮気女」というレッテルを思春期のメアリーが読んだのであれば、そこに女としての母を感じとったことは推測できるだろう。ルーベンスタインはさらに、メアリーが母と父の恋愛中のラブレターを読んでいとまで推測していく。父母の恋愛関係は1796年7月から始まり、二人はすぐに性的な関係になったらしい。9月29日の手紙はウルストンクラフトが自分の生理を不満げにほのめかしている。

「5時に会いましょう...でも帰ってきたら哲学的な話だけにしましょう。ご不満ですか。私も同様です。でも来週なら...」

11月13日の手紙は前夜の性的な満足を大胆に語っている。

「もし昨夜の至福が私の顔の血色を良くしたようにあなたの健康にも同じく良い効果を与えていたら、あなたは決断を破ったことを後悔しなくてすむでしょう。昨夜のことを思い出すと、今朝ほど活気ある血色が私の顔に表れることはめったにありません」(Rubenstein, 171)

ルーベンスタインの推測によれば、メアリーの誕生がちょうど九ヶ月後の1797年8月30日であることから、彼女がこの日を自分の受胎の日と考えたというのである。自分の受胎の場面＝「プライマル・シーン」を知ることがメアリーにとって母の女性性に不快感を抱かせた原因だと、彼は想像する。メアリーがラブレターを読んだかどうかの真偽はさておき、小説の中で怪物が創造されるのが「11月のあるわびしい夜」(5章)であり、メアリー自身の受胎の時期と一致しているのは興味深いことである。メアリーが小説中の怪物創造に母を排除したのは、出産にまつわる女性の性的欲望を抑圧したかったからだとは考えられないだろうか。

しかし生命の誕生における母の排除はすぐさま母に対する罪悪感をも産み出していく。フランケンシュタインが怪物を完成した直後、彼はその姿に「息もつまるような恐怖と嫌悪」を感じながら疲労から眠りにつき、悪夢を見る。

エリザベスが元気はつらつとして、インゴルシュタットの通りをあるいているところを見たような気がしたのです。喜びもし、驚きもして、わたしは彼女を抱きしめました。しかしはじめのキスをその唇に与えると、それは青黒く死んだような色に変わるのでした。彼女の顔立ちも変わったようすで、わたしは亡くなった母の死骸を腕に抱いていたように思います。その体は経かたびらに包まれ、そのひだの間には、墓の蛆虫ののたくるのが見えました。(58)

エリザベスから突然変容した母の亡骸は、まるで息子たちの愛の抱擁を妨げているようである。生命の誕生における母を排除することは異性愛の抑圧を意味する。つまりフランケンシュタインの無意識の中で、エリザベスとの異性愛を禁止することになるのである。そもそもインゴルシュタットで生命創造の研究に没頭して以来、彼はエリザベスとの関係から禁欲的に後退してきた。フランケンシュタインが母不在の生命創造に携わるかぎり、異性愛を成就させることはできないのである。しかしそれと同時に、母の神聖な領域を侵犯することへの後ろめたさは、彼の心の中で母の死体を抱くという近親相姦の罪悪感を伴っていく。作者メアリー・シェリーにとっても、誕生には「母」の死という後ろめたさがつきまとうのだ。

それでもメアリーに、そしてフランケンシュタインに、母を排除しようという強迫観念は続く。フランケンシュタインは怪物に頼まれて創りはじめた女の怪物を、途中でばらばらに破壊してしまう。それは男と女の怪物の間に子どもが生まれる可能性を考えたからである。激怒した怪物は「お前の婚礼の晩に出てくるからな」(168)と言い残し、その言葉通り、婚礼の晩に

姿を現しエリザベスを殺害した。ちょうどそのときフランケンシュタインは「敵の状況についてなにかの知識を得るまでは、彼女のところへゆくまい」(195)と決心し、研究生生活のときと同様、エリザベスから禁欲的に身を引いていたのである。小説中に異性愛が成就することはありなかった。

### 怪物/メアリーの母親探し

怪物は誕生直後、創造主によって捨てられた。彼はド・ラセー一家の隣の小屋で人目を避けて暮らすうちに、文字を学ぶ。そしてたまたま怪物はポケットに入っていたフランケンシュタインの日記を読むことになった。それは怪物が作られる前の4ヶ月間の日記だった。死体のあちこちをとってつなぎ合わせたという自分の誕生に至るまでの忌まわしい過程は、こと細かく日記に記録されていた。日記にはそれだけではなく、怪物の誕生までのフランケンシュタインの感情もつぶさに書かれていた。それはいわば母親の妊娠記録だといってもよいものである。怪物がこの日記を読んだときの精神的なショックとは、プライマル・シーン=原光景を知った子どものショックに通じるものだろう。怪物が日記を読む以前の「自分が誰なのだ？ 何者だ？ どこから生まれてきたのだろうか？」(128)という存在論的な問いは、「呪われた素性」という経験論的な解答を得ることで、彼を文字どおり忌まわしい「原光景」へと立ち返らせることになった。同時に彼は、「呪われた素性」に嫌悪したフランケンシュタインに捨てられたことも知るのである。彼の汚れた生が親の子捨てを引き起こしたといえるだろう。

メアリーの誕生直後の母の死は、怪物同様、親に見捨てられたという感情を娘の心に残したに違いない。メアリーが、再婚した父と継母の間に生まれたウィリアムに対して嫉妬心を抱いたとしても不思議なことではないだろう。怪物が最初に殺したのはフランケンシュタインの弟、そしてその名もウィリアムだった。フランケンシュタインを探す途中、弟に出会った怪物は、ウィリアムが恐怖心から親の名前を口にしたために殺してしまう。両親そろった異母弟ウィリアムに対するメアリーの嫉妬は、小説中で怪物の手によって晴らされることになったのである。

怪物が母なるものを最初に知ったのはサフィの言葉によってである。怪物の出自が母親不在であったために、そして創造主フランケンシュタインが自分を捨てたために、サフィの語る母の姿を通して、母への憧憬は増幅していった。怪物が死んだウィリアムの胸元に母キャロリーヌの肖像を見たとき、最初、彼女の美しさに喜びを感じたのはそのためである。しかし母の理想像とそれを決して所有できない絶望とのギャップはあまりにも大きかった。その怒りは、母を排除しながら子を捨てた創造主に向けられていくのである。

### フランケンシュタイン/メアリーの怪物としての子ども/小説

ルーベンスタインは「フランケンシュタイン」における秘密は「子の製造」であり、フランケンシュタインの実験室は「子宮」だとし、小説中の「子の製造」とメアリーの小説創作との類縁関係を読みとっている (Rubenstein 178)。バーバラ・ジョンソンもまた、生命の神秘を

探求しようという欲望と本を書くという衝動とを同一視している (Johnson 150)。メアリー・シェリーは1831年版の「フランケンシュタイン」に、「この小説の発端についてまとめて欲しい」という出版社からの要望に答える前書きをつけた。彼女はそこに小説の「原光景」を書くことになったのである。

1816年の夏、わたしたちはスイスを訪れ、バイロン卿の近くに住みました...

その年の夏は低温多雨、ひっきりなしの雨のため、たびたび何日も家の中に閉じこめられたものでした。ドイツ語からフランス語に訳された怪談本が数冊手に入りました...

「一人づつ怪談を書いてみようじゃないか」とバイロン卿がいい、みながその提案に賛成したのです...(7)

メアリーはバイロンやシェリーらの有名な男性詩人の間で一生懸命物語を考えたが、なかなか思いつかず、毎日屈辱を味わっていた。ある夜バイロンやシェリーが生命の原理についての談話をはじめ、そこでガルバニー電気によって死体を蘇らせる可能性が論じられた。その晩彼女は次のような夢を見る。

そのとき見たのです...不浄の術の研究者が、青ざめた顔で、自分の組み立てたもののそばにかがみこんでいるさまを。醜い幻のような人間がながながと寝ていてなにか強力な動力機関の働きを受けると、生命の兆候を示し、ぎごちない、半死半生の動作で動いたのです。(9)

メアリーのゴシック小説の創造場面は怪物の創造場面と見事に重なっていく。「いま、自分の醜い子どもをふたたび世間に送り出すにあたって、その幸福を祈ります」(10)というメアリーの言葉から、彼女が小説＝子どもを怪物と同一視していることがわかるだろう。何日も物語を思いつかずに味わったくやしさと、その背後に「女性のペン願望」が隠されている。しかし文学創造が男性の仕事である以上、女性、しかも「若い娘」がゴシック小説を書きたいという欲望は、まさに「怪物的」な行為である。それは生命の神秘を探求したい、生命を創造したいというフランケンシュタインの欲望と重なっていくだろう。彼の欲望は、生命の誕生に母を排除するというまさしく「怪物的な行為」であった。ジョンソンの言うように、本を書きたいという女性の欲望も母の領域を侵す男の欲望も、怪物しか産み出さないのだ (Johnson 151-152)。

19世紀に理想的な女性像としての母性イデオロギーが流布したことはすでに説明した。ジェーン・オースティン、ジョージ・エリオット、ブロンテ姉妹がこぞって、母亡き娘を主人公にしたのは、彼女らがこうした伝統的な女性像に影響されることなく、自分の道を切り開いていく可能性を作り出すためであった。しかしそれよりも数十年前に、メアリーの母ウルスト

ンクラフトはすでに伝統的な女性像を超えていた。偉大なフェミニストの思想家であり、同時に性的に奔放な母。メアリーは母の著作を読みその知性に憧れを抱きながら、母の女性性には反発を感じていたのであろう。メアリーの心の中の母への憧憬と反発。さらに母に捨てられた恨みと母殺しの負い目。母をめぐるメアリーの複雑な感情は、母なるものが両義的だからというだけではない。彼女は母なるもの、母の身体や女の欲望がまさしく自分自身の姿であることに気がついていたからである。このゴシック小説の探求する秘密とは、抑圧/排除された母性である。「フランケンシュタイン」は、モアズが「母性についての恐ろしい物語の記録」(95)だと呼び、ジョンソンが「自己の怪物性の自伝」(145)だと呼ぶように、他者であると同時に自己でもある母の物語なのである。

出産/創作にともなう葛藤から、子ども(怪物)と小説の類縁関係は続いていく。メアリーの肉体的な誕生が母殺しを引き起こしたとすれば、彼女の精神的な誕生、いいかえれば作家としての誕生＝「フランケンシュタイン」の創作もまた、比喩的な母殺しを引き起こした。しかも母親の役割を剥奪する物語を描くことで、娘は創作者(母)になり、母からの自立を彼女は達成したのである。

#### 注

1. 平林「母性観の推移(1)」

#### 使用文献

- Baldick, Chris. *In Frankenstein's Shadow: Myth, Monstrosity, and Nineteenth-century Writing*. Oxford, Clarendon Press, 1987.
- Dussinger, John A. "Kinship and Guilt in Mary Shelley's *Frankenstein*." *Studies in the Novel* 8(1976):38-55.
- Gilbert, Sandra M. and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic: The Woman and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. New Haven and London: Yale University Press, 1979.
- Homans, Margaret. *Bearing the Word: Language and Female Experience in Nineteenth-Century Women's Writing*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1986.
- 平林美都子。「母性観の推移(1)－英国を中心に－」『愛知淑徳短期大学研究紀要』第37号(1998):123-142.
- Johnson, Barbara. "My Monster"/My Self. *A World of Difference*. The Johns Hopkins University Press, 1987.
- Kahane, Claire. "The Gothic Mirror". *The (M)other Tongue: Essays in Feminist Psychoanalytic Interpretation*. Ed. Shirley Nelson Garner, Claire Kahane and Madelon Sprengnether. Ithaca and London: Cornell University Press, 1985. 334-351.
- Moers, Ellen. *Literary Women*. 1963. New York: Oxford University Press, 1976.
- Rubenstein, Marc A. "My Accursed Origin": The Search for the Mother in *Frankenstein*. *Studies in Romanticism* 15 (Spring 1976):165-194.
- Shelley, Mary. *Frankenstein*. Oxford and New York: Oxford University Press, 1985.